

復刊第1号
平成28年3月15日

「蕁の文化」研究会
SOCIETY FOR THE STUDY OF WARA CULTURE
主宰：宮崎清
Chairperson : KIYOSHI MIYAZAKI



寒波のなかで椿が春を告げてくれました。春は、休んでいた息吹の始まりです。

昭和61年1月15日の創刊号から昭和63年1月15日の第7号まで2年間刊行してきた『蕁』は、今日までの28年間、休刊しておりました。近代化・工業化のうねりのなかで消えていった「蕁の文化」を、いま再び、私たちは思索し、その今後を見据え実践していく必要があるのではないかと。深遠でとてつもなく広大な「蕁の文化」に関する情報を多くの方々と交換し、それらが積み積み、やがて上昇気流となり、あるべき風土と文化の共通認識に通じていくのではないかと。

復刊『蕁』は、「蕁の文化」に関する情報の吹き溜まりをめざします。

〔写真と文：宮崎清〕

**The more I learn, the more I realize I don't know.
The more I realize I don't know, the more I want to learn.**
Albert Einstein:1879-1955

●木と同じくらい高い価値をもった草

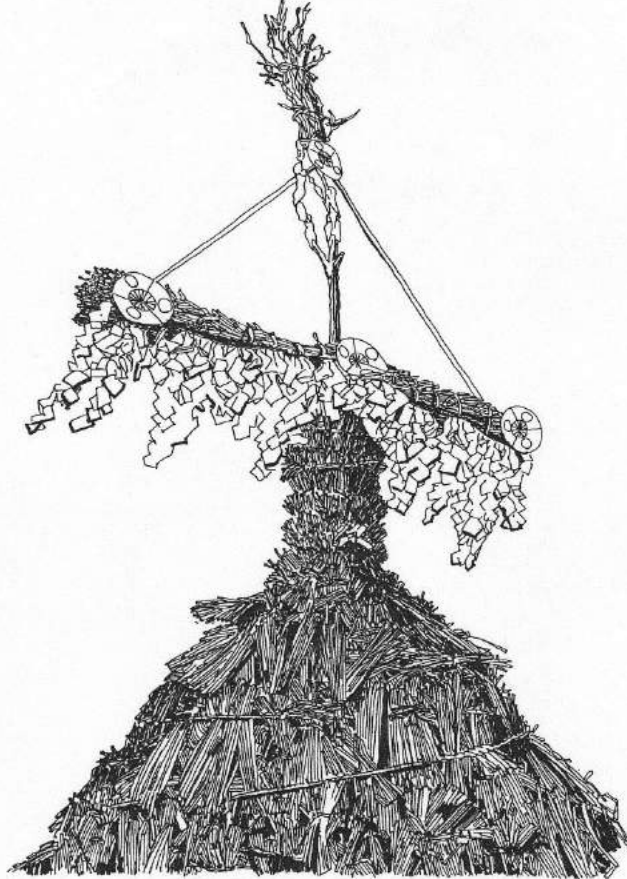
下から上に目を移しながら、藁という漢字をじっくり眺めてみましょう。「木と同じくらい高い価値をもった草」と読めませんか。

私たち日本人は、藁にこれほど高い価値をおいてきたのです。藁の活用の幅広さと知恵の豊かさをみると、そのことが首肯できます。

さまざまな被り物や履物をつくり、頭の上から足の爪先にいたるまで、身体全体を藁で包んできました。飯櫃入れ、鍋敷き、束子(たわし)など、多くの食生活具が制作されました。扱首(さす)組みの縄、畳床、円座、腰掛け、蒲団、暖簾、嬰兒籠(えじこ)、箒(ほうき)など、藁は住まいをつくるのにも、その内での生活にも、欠かせませんでした。穀物収納の俵(かます)や俵、養蚕の簇(まぶし)、牛馬に履かせた草鞋(わらじ)など、生業関係でも数多くの藁製品がつくられました。また、運搬用具では、背負い梯子(はしご)、縄袋、砥袋(とぶくろ)、土砂運搬の畚(もっこ)、負い縄など。縄跳びに代表される遊びの世界でも、藁は欠かせませんでした。

藁は、木の文化とともに、日本人の生活を支える大切な役割を担ってきました。「米は藁づくり」と各所でいわれてきたのは、「しっかりした藁を育てないと米が実をつけない」ことを意味するとともに、生活において藁を多様に活用するために米づくりが行なわれてきたことを示しているのです。

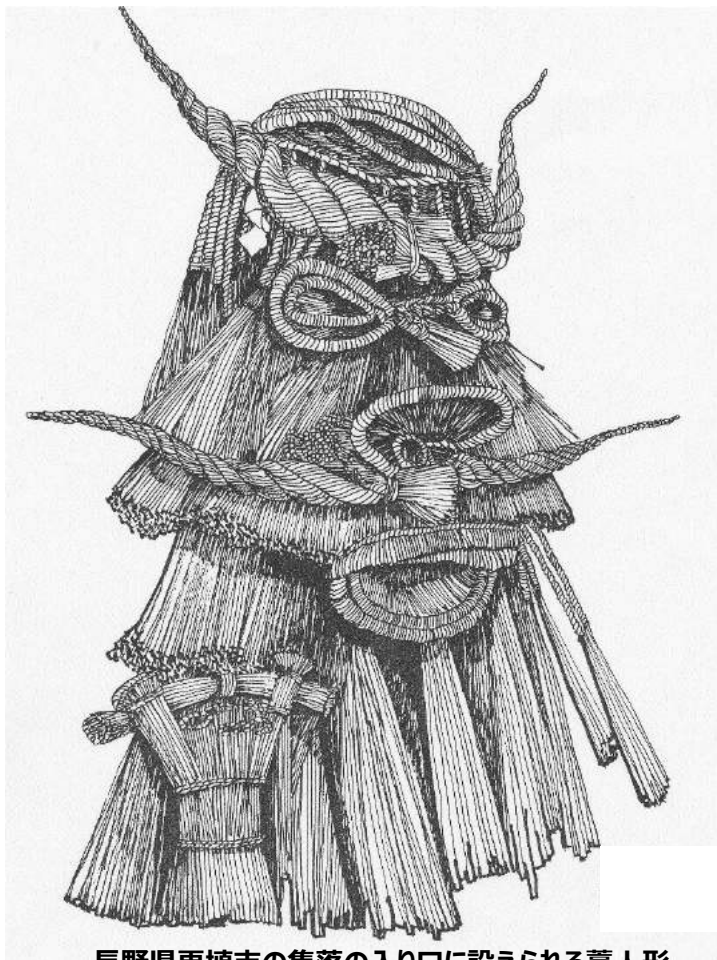
●祈りの意匠として



サイノカミ 福島県奥会津の三島町で行われる小正月行事。集落の広場に立て、1年の平安と健康を祈念する。

日常生活用具ばかりではありません。注連縄(しめなわ)によって神々を招き、神仙への供物を藁皿に盛り、盆には藁火を焚き、ワラ馬や藁人形をつかって死者の霊を迎えました。外からさまざまな災厄が侵入しないようにと願って、集落の入口に大きな藁人形を据えたり巨大な藁草履(そうり)を吊るす地域もありました。子どもが初誕生を迎えると、草履や草鞋を履かせ、負い縄で祝い餅を背負わせる習俗もみられました。こうして、さまざまな信仰や儀礼においても、藁は重要な素材としての地位を与えられていたのです。

「志めかけて立てたる門の松にきて春の戸あくるうくいすの声」(夫木和歌集)。おめでたい正月の光景が浮かびあがってきます。新藁を用いて、歳神(としがみ)を迎えるための標(しるし)として、また、内と外とを区画して浄と不浄のけじめをつけるものとして、注連縄を制作してきました。新藁が必ず用いられることを考えると、注連縄は農耕の神を迎えることとも連動していたに相違ありません。その意匠は地域によってさまざまですが、いずれにも、新年が譬しくあれと祈り願う人びとの心が表出されています。注連縄の意匠には、春・ハレを迎えたいと祈る人びとの心が込められているのです。



長野県更埴市の集落の入り口に設えられる藁人形。
その造形力のたくましさには驚かされる。

●心を包むものとして

苞(つと)は、草を用いてつくられる包(つつみ)のことです。

日本の伝統的なパッケージである苞には、さまざまな美しい意匠があります。なかでも、藁を材料としたものには、秀作が少なくありません。幸運を分かちあうときには、藁苞に入れた祝いの品が隣人や親類に贈られました。かつて小作人が地主に収穫物を贈る際に制作した京都府綴喜郡地方の苞は、まさに、「心の造形」と表現するにふさわしい意匠です。あたたかく、やわらかな、そして、つややかな藁が、包まれるものをいたわるように包んでいます。日本の苞の代表は、このような藁のパッケージなのです。

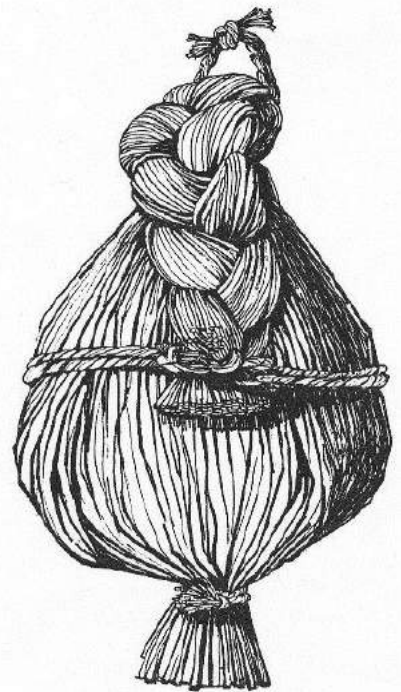
藁は管状の構造体ですから、それを束ねれば適度に外気を遮断することができ、クッションの役割を果たすこともできます。イズミと呼ばれる苞は、米を炊きあげた釜を入れて保温したり、壊れやすい陶器などを入れて保護してくれたものです。

また、『徒然草』に「都の苞に語らむ」などの記述があるように、苞は、みやげとして家に持ち帰る土地の産

アメリカ東部ボストン郊外のセイラム・ビーボディー博物館には、「モース・コレクション」と呼ばれる3万点に及ぶ100年前の日本の生活用具が収蔵されています。

アメリカの生物学者モースは、明治維新政府に招かれた外国人のひとりとして、明治10年代に3度日本を訪れています。日本各地への旅のなかで彼が採集したコレクションは、富国強兵と殖産興業をスローガンに近代国家の建設途上にあった当時の日本と日本人の生活の様相を伝えてくれています。日本滞在記録である『モースの日記』に、彼は、「新年用の飾り物は、さまざまにねじり編みあげた稲藁でできている。それを家の入り口と屋敷内の祠にかけることを日本人びとは習いとしている。美しい意匠が多く、なかには相当凝ったつくりのものもある」と記しています。

注連縄の美しい造形は、外国人の眼をしっかりととらえて離さなかったのです。モースは、注連縄の美の背後にそれに託してきた日本人の祈りの心をみて



京都府綴喜郡地方に伝えられていた苞。
小作人が地主に収穫物を贈る際に用いられた。

物をも意味していました。かつての旅のみやげは、藁を素材にしてつくられた美しい包みであったのです。

納豆づくりに藁は欠かせません。藁に潜んでいる菌が、糸引き納豆をつくってくれるのです。各地でつくられる藁の納豆苞に美しい造形が多いのは、納豆をつくってくれる藁そのものに、人びとが美しいれぬ感謝の心を抱いてきたからなのでしょう。ここにも、心を包むパッケージがみられます。

●夢の実現を託すものとして

七つの神様（布袋、大黒天、恵比須、毘沙門天、弁財天、福祿寿、吉祥天）を乗せ、海の向こうからやってくる宝船。人びとは、海のかなたにどのような世界が開けているか強い関心を抱いていました。まだ見ぬ世界に夢を膨らませ、海の向こうに宝の世界を思い描いたのでしょう。宝船は、海のかなたに存在する世界と現実的な世界とを結びつける、壮大なロマンの産物です。他界から夢を運んでくる宝船の造形の背景には、人びとの壮大な夢があったのです。

夢は人類の進歩の源泉です。もし私たちが夢を描けなくなってきたときには、ある種の終焉を迎えているのかもしれませんが。夢は、夢の実現に向けて努力する生命力を与え続けてくれるものだからです。

人びとが夢を描くのに藁を用いたのは、藁が手近に大量にあったということだけに起因するものではありません。ワラシベ一本の大切さを説いた「ワラシベ長者の物語」が全国的に流布しているように、また、「笑われる」の本来の意味は「水の管理などを十分にしないで藁が割れてしまうような米づくりをすること」であると各地で言われているように、藁は神と同様に大切にすべきものであったのです。米づくりと生活の平安をもたらしてくれる海のかなたの神々を乗せる船は、おのずと、藁を用いてつくらなければならなかったのです。

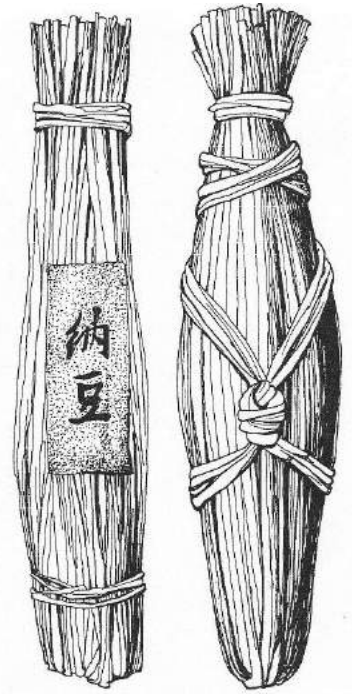
●輪廻転生の文化

藁は、さまざまに活用されてきました。しかし、およそすべてのものに寿命があります。むしろ、藁の寿命は相対的に短いというべきかもしれません。人びとは、このことをよく知りつくしていましたが、藁との適正なつきあい方を生活の習いとしてきました。

たとえば、草履や深沓が雨や雪に濡れると、囲炉裏(いろり)の上の火棚に吊るし、そのつど乾燥させました。また、生活で必要とされるおよそすべての藁製品は冬の農閑期に制作されましたが、完成品はそれが使用されるまで母屋の屋根裏に貯蔵されました。そこは囲炉裏から立ちのぼる煙によっていつも乾燥し、虫を寄せつけないところであったからです。背中当てにほころびが生じると、女性たちは冬の陽だまりに腰をおろして、つくろいをしました。新藁やぼろ布をほころびに差し入れ、補修に補修を重ねました。藁屋根が朽ちると、男たちは痛んだ部分に新藁を差し入れました。男も女も、藁の寿命を十分に知りつくしていたから、修繕の技術をきちんと身につけていたのです。

管理・補修をしつつも、いずれは、最終的な寿命が訪れます。その段階を迎えると、藁が果たしてくれたさまざまな役割に感謝しながら、堆肥(たいひ)として腐熟させるかあるいは焼却して藁灰にするかして、その生まれ故郷である大地に帰したのです。そして、大地に帰った藁は新たな作物を育てる養い・肥やしとなりました。藁が藁を育てる元となったのです。

藁の一生は、すぐれて循環的です。大地から生まれた藁は、人間世界でさまざまに活用された後に、大地に戻されました。大地に戻された藁は、再び、新たな生命としての藁を育てました。藁の一生には終焉がありません。自然の生態系を阻害することなく、自然と人間の世界を循環的に結びつけていました。藁の一生は、輪廻転生の世界なのです。



納豆の苞

[注]この拙稿は、SOLAR CAT NO.22(2004年)に掲載いただいたものに若干手をいれたものです。

●コメのなる木

日本では、縄文式文化時代後期から今日まで、およそ3000年以上にもわたって、「コメのなる木」を栽培しつづけてきました。そして、日本人は、「コメのなる木」をつくることに大きな誇りをもってきました。その証拠に、たとえば山形県には、「おらが在所に来てみやしゃんせ、コメのなる木がおじぎする」という土地自慢唄が伝えられています。「大きく太ったコメがたくさん実をつけた木」がたんぼ一面に広がっている光景を、人びとは、このように唄って、土地の誇りとしてきたのです。「コメのなる木」とは、もちろん、イネのことです。

イネは、元来、南方系の熱帯性植物でした。そのイネを、南北に細長く、四季寒暖の差が大きな日本の各地で栽培できるようになったのは、なにより、私たちの祖先がイネの栽培に対して強い意欲をもち、絶えず研究を重ねてきたからにほかなりません。日本の気候にあったイネの品種をつくるのに、先人たちははかりしれないほどの努力をしてきたのです。

イネづくりに対する努力と並んで、私たちの祖先がイネからコメを収穫した後の残りものである藁を多面的に活用してきたことを、忘れてはなりません。藁を巧みに活用することが、日本人の生活のみならず、日本におけるイネづくりを支えてきたといっても、決して過言ではないのです。

日本文化の特質のひとつは、確実に、「藁の文化」であったといえるのです。

●清少納言がみたもの

平安時代の作家・清少納言は、ご存知のように、『枕草子』の筆者です。彼女は、そのなかで、当時のコメの収穫の様相を次のように描写しています。

穂に出でたる田に、人いと多く騒ぐ、稲刈るなりけり。（中略）男の片手に、いと赤き稲の、本は青きを刈り持ちて、刀か何にかあらん、本を切るさまの安げに、めでたき事に、いとせまほしく見ゆるや。

清少納言が「刀か何にかあらん」と記したのは長い柄のついた鉄鎌のことです。彼女は、「本（もと）は青きを刈り持ちて」「本を切るさまの安げに」と明記して、当時のイネの収穫方法が一般的に「根刈り」であったことを伝えてくれています。つまり、イネを根元の部分で刈り取る方法が広く採用されていたのです。

また、清少納言は、次のようににぎにぎしい光景を記録にとどめています。

稲と云ふ物多く取り出でて、（中略）五六人して扱がせ、見も知らぬくるべき物二人して引かせて、歌謡はせなどする。

人びとは、豊作に歓喜しながら、イネの実を扱（こ）いた後に、「見も知らぬくるべき物」である挽臼（ひきうす）を用いて粳すりしていたのです。

こうして、『枕草子』に描かれているように、長い柄のついた鉄鎌を用いての「根刈り」のみならず「粳の扱き落とし」が早くから一般に広く定着していたことは、同時に、コメの収穫に伴ういわば副産物としての藁を生活のなかで活用する知恵も一般化していたことを意味しています。なぜなら、藁を活用する必要がなければ、今日でも東南アジアでみられるように、実をつけた穂のすぐ下の部分で刈り取る「穂刈り」の方法で十分だからです。

「藁の文化」は、イネの「根刈り」とともに生誕したといえます。

こうして、日本人は、生活を成り立たせる素材として藁を高く評価し、往古から、それに重い価値を置いてきたのでした。

●「副産物活用文化」

「根刈り」による収穫と「粳の扱き落とし」による脱穀法とが採用されると、刈り取りの後に残る根株、脱穀によって生じる藁、粳すりの際に玄米と分離される粳殻、精米の際に白米と分

離される糠など、コメを生産および精製する過程でいくつかの副産物がもたらされます。これらの副産物を、先人たちはどれひとつむだにすることなく、次のように活用してきました。

根株は、春先の田起しによって田土と混ぜられ、有機質肥料となりました。粃を落した後の茎葉部である藁は、後述のように、生活の全面にわたってさまざまに活用されました。粃殻は、田畑や苗床に撒かれる肥料や保温材、大根や芋などの保温貯蔵材、枕の詰物、卵や果実の容器に入れる緩衝材、燃料や牛馬の飼料、養蚕具の湿気止めなどに、広く利用されました。糠は、粃殻と同じく肥料や飼料になったほか、漬物用の糠味噌をつくるのに用いられました。この糠味噌にさまざまな畑作物が漬けられ、日本人にとってなくてはならない糠漬けがつくられました。また、糠からは、食用ならびに工業用の油が搾られました。油分を大量に含んでいる糠は、それを布に包んで、木材磨きなどにも使われました。

こうして、イネの刈り取り、脱穀、調整という一連の過程で産出される根株、藁、粃殻、糠などのいわば副産物を、先人はすべてむだなく活用してきました。このような知恵を、私は「副産物活用文化」と呼ぶことにしています。

「藁の文化」は、このような「副産物活用文化」の最も代表的な一要素なのです。

●「一物全体活用」

藁の利用を前提とした「根刈り」によるイネの収穫が行われるようになると、地干し、棒掛け、ハサと呼ばれる多段式の掛干しなど、さまざまなイネの乾燥方法が発達します。そして、「根刈り」されたイネを扱き簀や干歯で扱いだ後の藁は、二ホと呼ばれる大きな山状に野積みして貯蔵されたり、納屋、藁小屋、母屋のツシ（屋根裏）などの戸内に貯蔵されました。人びとは、必要に応じこれらから藁を取り出し、さまざまに活用したのです。

1本の藁は、ハカマなどと呼ばれる葉、幹に相当する稈、稈の先端についているミゴ（シベとも呼ばれる）の三部からなっています。日本人は、これらすべてを実に巧みに活用してきたのです。

脱穀によって得られる藁は、そのままのかたちで、燃料、飼料、肥料、敷藁などに用いられました。このうち、敷藁は畜舎に敷いて牛馬に踏ませたもので、最終的には肥料として田畑に返されました。

スグリによって稈から取り除かれたハカマは、各種の容器や寝床、蒲団、沓類などの詰め物として用いられたばかりか、燃料や飼料、肥料としても活用されました。また、スグリワラはキワラとも呼ばれ、単独にかあるいは茅と併用されて屋根葺き材となりましたし、住居や小屋の風雨よけ、土壁に塗り込まれてその崩壊を防ぐための寸莎（すさ）、あるいは、注連縄（しめなわ）などの細工物の材料として用いられました。

さらに、スグリワラ・キワラを叩いたタタキワラによって、実にさまざまな生活用具がつくられました。

スグリワラの先端部のミゴを利用するには、それを稈から抜き取るミゴヌキの作業が行われます。ミゴは強靱で光沢があるので、漁網などの精巧な細工物をつくる材料となったばかりか、しおりや結束材などに用いられました。

このように、藁を構成しているすべての部所が実に目的的にまったくむだなく活用されていくところに、「藁の文化」の特徴のひとつがあるといえるのです。ひとつの物体を構成している各部所の特徴を生かして物体のすべてを無駄なく有効活用していく知恵を、私は「一物全体活用」と呼んでいます。日本における藁の利用は、すぐれて、「一物全体活用」なのです。

●生活における多様な展開

藁は、このような利用とともに、生活用具づくりの素材として盛んに活用されました。しかも、藁を素材として制作された生活用具の領域は、衣食住生活のみならず各種の労働、運搬、通過儀礼や年中行事のような祝いと祭りの生活、子どもたちの遊戯の世界にまで及んでいます。およそすべての生活領域にわたって、藁を素材とする生活用具が制作され使用されてきたのです。

たとえば、衣生活においては、頭にミノボッチと呼ばれる被り物を着用し、背や肩や腰を蓑(みの)でくるみ、手には藁手袋をはめ、そして、足には脛巾(はばき)、草履(ぞうり)、草鞋(わらじ)など多くの履物を着装しました。頭の上から足の先に至るまで、日本人はいわば身体全体を藁で包んだのです。食生活では、飯櫃(めしびつ)入れ、鍋(なべ)敷き、鍋取り、ベンケイ、束子(たわし)、卵のパッケージなど。住生活においては、小屋組みの藁縄、日本の敷物の代表ともいえる畳、敷き藁(むしろ)、円座(えんざ)、蒲団(ふとん)、縄暖簾(のれん)、幼児の保育容器である嬰兒籠(えじこ)、蓐(ほうき)、腰掛けなど。生業関係では、コメや各種作物を収納するための俵や俵(かます)、日本の産業革命の遂行に欠かせなかったといわれる養蚕のためのマブシ、牛馬の草鞋など。さらに、運搬用具では、縄袋、背負い梯子(はしご)、土砂運搬のモッコ、背負い運搬のための負い縄など。

人びとは、注連縄(しめなわ)を張って神々を招き、神仙への供物を藁皿に盛り、盆には藁火をたいたり藁馬や藁人形をつくって死者の霊を送り迎えしました。幸運を分かち合うときには、祝いの品を藁苞(つと)に入れて隣人や親類に贈ったりもしました。信仰、祝祭、儀礼のおりにも、藁は重要なものづくりの素材としての地位を与えられていたのです。

こうして、藁を用いて制作された生活用具を挙げていくと、その種類は枚挙にいとまがないほどです。衣食住、生業、運搬、祝い、祭り、遊びといった生活の全面にわたって、さまざまな藁のものづくり文化が展開されたのです。

私たち日本人は、藁のなかで生まれ、藁のなかで育ち、藁のなかで彼岸に送られ、そして、藁によって彼岸からこの世に迎えられたのでした。まさに、日本人すべての暮らしにとって、藁は欠くことのできない大きな文化要素であったのです。

●「藁の文化」と「非藁の文化」

ところで、これほどまでに広範な「藁の文化」が展開されてきた背景には、各種の軟質な植物繊維を広く生活のために活用していこうとする技術の体系があったのです。とりわけ、藁を自由にそして幅広く活用することができるようになる以前にあっては、藁に類した各種の軟質な植物繊維が生活のために広く用立てられていました。藁の利用を前提としたイネづくりがこの日本に定着する以前から、いわば「非藁の文化」が存在していたのです。

たとえば、茅(カヤ)や棕櫚(シュロ)などは、「藁の文化」が定着する以前から、住居やさまざまな生活用具をつくるのに活用されていました。また、科(シナノキ)や山葡萄(ヤマブドウ)などの樹皮も、多くの生活用具づくりに用いられていました。

およそ、生活用具づくりにかかわる「藁の文化」は、そのような「非藁の文化」のうえに初めて花開くことができたと考えられます。

ですから、「藁の文化」は、前述の「副産物活用文化」と「非藁の文化」という二つの文化が交差したところに花開いたといえるのです。しかも、すぐれて、「一物全体活用」の知恵に支えられていました。

さて、先行して確立されていた「非藁の文化」が基盤となって成立することのできた「藁の文化」は、いうまでもなく、「手づくりの文化」です。そのほとんどは、特別の道具や機械を用いずに、人びとによって手づくりされてきたものです。

藁をすぐり、打ち、縄(な)い、組み、編み、束ねなどしながら、とくに戸外での農作業が休みの冬期間には、家族総出で藁仕事が行われました。ときには隣人たちが寄り集まって、世間話に花を咲かせながら、藁仕事が行われました。それは、人びとにとって、冬の寒さに耐えながらのつらい仕事でしたが、人間関係を確かめ、より緊密なものにしていく交わりの機会でもあったのです。藁の取り扱い方、藁細工の技術は、そのような交わりのなかで、おのずと青年や子どもたちに受け継がれていきました。「縄縄いができて一人前」などといわれるように、地域に居住する人びとすべてが、共有の生活技術として「藁の文化」を修得したのでした。

親のために、夫のために、妻のために、子どものために、隣人のために、藁工品はひとつひとつついでに心にこめて作りあげられたましたから、そこには、おのずと、質実な美的世界が

つくりだされました。「藁の文化」は、日本人が生活の必要のなかから築きあげてきた、貴重な美的造形世界なのです。

●エコロジカルな「巡りのシステム」

人びとの藁に対する態度には厳しいものがありました。「藁一本も決してむだにするな」が、親から子への、しつけのことばでした。藁一本を大切にしながら最終的には億万長者になっていく「ワラシベ長者」の物語りが全国各地に伝えられていることは、日本人全員が藁に対して高い価値を置いていたことを教えてくれます。青年や子どもたちは、藁を用いてのものづくりの方法ばかりでなく、「おコメの親」としての藁との交わりの作法、先人たちが藁に托してきた精神的な世界までも、知らず知らずのうちに、祖父母や両親、村人たちから教えこまれたのです。

藁工品にほころびが生じると、冬の日だまりに莖を広げ、女性たちはそのほころびを補修しました。そして、藁工品に最期の寿命が訪れると、それが果たしてくれた役割に感謝しながら人びとはそれをすべて土に帰したのです。

藁を素材に制作された品物に寿命がくると、燃料や堆肥に転用しました。燃焼した藁は、藁灰となって大地を肥やす肥料になりました。糞尿といっしょに牛馬に踏ませた敷藁も、肥料となりました。「肥え」「養い」と呼ばれ、肥沃な大地をつくってきたのです。つまり、土から生まれたワラは土に戻され、次の新たな藁の生命を育む基盤となったのです。こうして、藁の利活用の体系は、実にエコロジカルな、循環的で自己完結的な「巡りのシステム」を構成していたのです。藁が藁を生み、大地と人間の世界とが途切れることなく、しっかりと結びつけられていました。自然と人間とが、輪廻の環によって、強く結ばれていたのです。

●「藁の文化」の心をつなぐ

これまでみてきたように、「藁の文化」は、

- 一、稲作農耕過程において産出される各種の副産物をむだなく生活の諸場面に用立てる「副産物活用文化」の中心である
 - 二、衣食住、生業、運搬、祝祭、遊戯など、日常のみならず非日常生活の全面にわたって展開されたものである
 - 三、先行して存在していた「非藁の文化」を基盤として発展してきたものである
 - 四、広範な生活用具づくりの素材として活用され、世界に類をみることのできない美的造形が人びとの手によって展開された
 - 五、自然と人間とを有機的に結びつけるエコロジカルなシステムを構成している
- などの特色をもっています。

ところで、豊かな展開を遂げてきた「藁の文化」は、どこに行ってしまったのでしょうか。コメがどのような植物の実であるかを知らずして、果たして、日本人といえるのでしょうか。イネを育てるために先人が藁を大切にしてきた事実を知らずして、日本人といえるのでしょうか。

日本人が水稻耕作民族としてコメを生産していく限り、藁は永遠に収穫されます。その量は、筆者の試算によると、日本各地で毎年生産される藁を全部集めて太さ1センチの縄をつくったとすると、なんと、地球と月との間を36往復もできるまさに天文学的な長さに達します。毎年これほど大量に入手することが可能な藁の価値を再発見し、伝承・創新していく探究を行うことは、私たちすべてに問われている大きな課題のひとつです。明日の世界は、先人たちが築きあげてきた歴史の重みをしっかり受け止めることを抜きにして構想できません。先人たちが育んできた智力や生活技術を総点検する作業のなかから、今日や明日の歩みの方向性がみえてくるのです。ゴーギャンの絵の題名にあるように、「われわれはどこから来たのか、どこに立っているのか、そして、どこへ行こうとしているのか」と「内省する心」にこそ、明日を生きるための出発点があるのです。

[注] この拙稿は、千葉県立現代産業科学館における2001年(平成13年)度サイエンスショーにて発表したものに若干手をいれたものです。

昨年の10月7日、美郷町教育委員会教育長 福田世喜様からメールが入りました。

前略 突然のお便りにて失礼いたします。

私は、秋田県美郷町教育委員会教育長の福田世喜（せいき）と申します。

宮崎先生の著作「図説 藁の文化」（法政大学出版局）を拝読し、たいへん学ぶところが多く、感激しているところであります。

折しも本町では、この10月1日に、これまでの「美郷町郷土資料館 わら細工館」の展示物を引き継いで、新たに「美郷町歴史民俗資料館」をオープンさせたところであります。そこには約600点のわら細工を展示している「わら細工展示室」を設けております。

ついては、勝手なお願いで恐縮であります。宮崎先生に「美郷町歴史民俗資料館」をご視察いただき、お気づきの点についてご指導をお願いできないでしょうか。また、来年1月から3月の間に、「美郷町歴史民俗資料館 わらと民話の祭典」を企画したいと考えております。その折に、是非ご講演をお願いできればとも思っております。

誠に勝手なお願いですが、先生の研究成果を広く町民に理解していただき、「ワラの文化」の保存の意義を再確認し、今後の継承・発展につなげていくことを強く願っております。

どうかご検討をよろしくお願い申し上げます。

草々

私は、すぐにでも飛んで行きたい気持ちに駆られました。福田様からのメールには、新装なった「美郷町歴史民俗資料館」の展示の様子を克明に伝えてくれる多くの写真が添付されていました。統廃合になった小学校校舎を改装した展示室には、白壁や板壁をバックに、数多くのワラの生活用具が展示されているのです。



上：鐘馗様 下：屋形船

私はすぐさま、メールをお返しして、拝見させていただく日取りを相談いたしました。そして、11月10-11日、美郷町の「ワラの文化」にめぐりあえました。玄関では、大きな鐘馗様の藁人形が迎えてくれました。作り手が少なくなったものの、いまでも、毎年ケヤキの大木の下で、集落の平安と人びとの健康を護ってくれているといひます。

館内は実によく整備され、美郷町が刻んできた「藁の文化」を宝物としてみなしている心が反映されていました。私は、「日本一です」と、はっきり申し上げました。

3月の催事挙行も、確定的になりました。



ご案内くださった皆さま

「わらの文化」 入門の集い

日時 3/5_土
平成28年

～失われつつある「わら文化」を次世代に伝えていきます～

場所 美郷町歴史民俗資料館

※当日は入場無料です。

参加者
募集

基調講演

定員 60名 15:00～16:00

演題 「ワラからのメッセージ：
私たちの生活文化の基底にあるもの」

■講師 宮崎 清 氏 (千葉大学名誉教授)

宮崎 清 氏 プロフィール / 昭和18年 山梨県生まれ。千葉大学名誉教授。アジアデザイン文化学会
総会長。国内外の学生たちとともに、長年「野にでて生活を学ぶ」作業を実施。人が暮らしているところ
には驚愕するほどの文化＝知恵が内在しているとの認識に立ち、その暮らしの総体を掘り起こし、
創造的に継承・展開していくことを説くとともに、実践。



パネルディスカッション

コーディネーター

宮崎 清 氏

16:00～17:00

テーマ 「わらの文化の
現状と展望」

パネリスト

宮本 康男 氏

(元秋田県立博物館主任専門員)

進藤 晃成 氏

(わら細工伝承者)

一ノ宮 繁 氏

(わら細工研究者)

松田 知己

(美郷町長)

わら細工の実演・体験

13:00～14:00

指導者 ●田口サダエ氏、大和福三郎氏

(どなたでも参加できます)

昔 語 り

14:00～14:30

語り手 ●美郷民話の会の皆さん

(どなたでもお聞きになれます)

交 流 会

18:00～20:00

会場 ●美郷町宿泊交流館「ワクアス」

会費 4,000円

※交流会会場への移動については、バスをご利用いただけます。
宿泊が必要な方は「ワクアス」等をご紹介しますので、お問い合わせください。

定員 25名

.....申込期限.....
平成28年2月26日(金)

申込み
問い合わせ

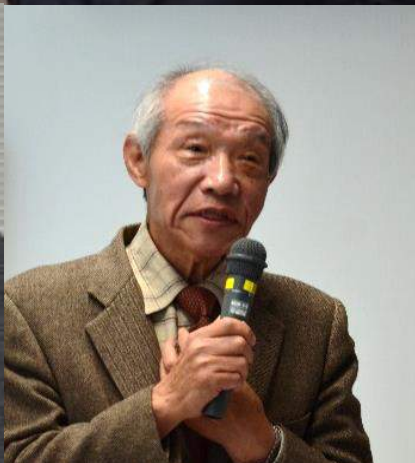
美郷町教育委員会生涯学習課
歴史文化財班 (美郷町学友館内 8:30～19:00 休館日:月曜日)
TEL 0187-84-4040 FAX 0187-84-3763



上の写真は、美郷町歴史民俗資料館ならびに仙北市立樺細工伝承館において撮影したものです。撮影：宮崎清



上の写真は、美郷町歴史民俗資料館ならびに仙北市立樺細工伝承館において撮影したものです。撮影:宮崎清



上の写真は、美郷町歴史民俗資料館における「わらの文化入門の集い」の様子です。撮影：常田純孝・宮崎清

宮崎先生からの元旦の年賀状に、この3月に「秋田県的美郷町に行きます」の通りに、3月3日、20キロ先の私どもの角館に、なんと先生は奥会津三島町からお1人で車を運転しお越しくださいました。そして、お仲間の方々は、遅くに、浜松町より角館行き直行夜行バスでいらっしゃいました。

4日角館武家屋敷辺りを散策し、その夜、美郷町長松田知己様と藁文化と湧き水を肴にいろいろとお話を交換させていただきました。

翌5日、美郷町主催による、宮崎先生の基調講演と「藁からのメッセージ」「私たちの生活文化の基底にあるもの」また、「藁文化の現状と展望」についてのパネルディスカッション(15:00-17:30)、そして、その後の交流会で夜遅くまで来し方を振り返り、未来を展望し、全国からの有志の方々と楽しくも有意義なひとときを過ごさせていただきました。

ギリギリの戦前生まれの小生が育った環境は、なんといかに藁に恵まれていたことかを痛感し、目から鱗の感じでした。

寒い冬の家のなかの土間をヘドロ、サンペを履き、あったかい藁でつくった「しべ布団」で楽しい夢をむさぼり、幸せな幼少年期を過ごしてきたことかを思い起こし、いまさらながら、万感胸に迫るものがあります。

平安時代の今昔物語の「ワラシベ長者」の藁1本から千両獲得までの夢物語は未来に希望を持たせる明るい話の裏に、藁の1本の大切さを主張する稲作文化＝藁の文化としての象徴の物語と理解されます。

いつかまた、大切な文化を継承させるこのような催しが熱望されてなりません。

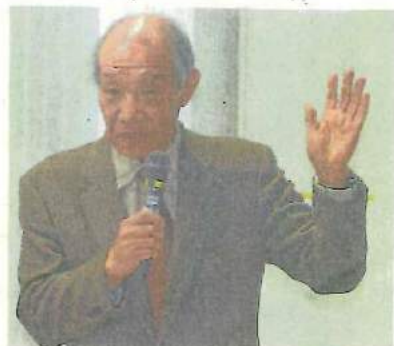
企画されました美郷町長松田様、実践されました宮崎先生、限りない御礼を申し述べます。

2016.3.7 秋田新報

「わらの文化」入門の集いが5日、美郷町歴史民俗資料館で開かれ、わらの文化研究で知られる千葉大学名誉教授の宮崎清さん(73)がデザイン工学0人を前に講演した。宮崎さんは「わらは衣食住や労働、祭りなど生活全般に生かされてきた。わらの文化が廃れたら、わら文化によって培われた日本人の心もなくなってしまう」と述べた。

「わら文化は日本人の心」

専門家講演、継承を訴え



美郷町で集い、100人参加

宮崎さんは、しめ飾りややかやぶき屋根に似たものが韓国にもあることを紹介。「稲が日本に伝わった経路は諸説あるが、朝鮮を経由したルートが

「わらの文化」入門の集いが5日、美郷町歴史民俗資料館で開かれ、わらの文化研究で知られる千葉大学名誉教授の宮崎清さん(73)がデザイン工学0人を前に講演した。宮崎さんは「わらは衣食住や労働、祭りなど生活全般に生かされてきた。わらの文化が廃れたら、わら文化によって培われた日本人の心もなくなってしまう」と述べた。

スカッションも行われ、宮崎さんをコーディネートした、元国立博物館主任専門員の宮本康男さん、わら細工を伝承する美郷町の進藤晃成さんと横手市の一ノ宮繁さん、松田知己美郷町長の4人がパネリストとして、わらの文化の現状と展望について意見を述べた。パネリストからは「履物など日用品を作る人が少なくなっている。技術の継承は急務だ」「わら細工の技術継承はお年寄りの生きがいづくりにもなるのではなかいか」などの声が上がった。(佐々木真弥)



ヘドロ

今回の美郷町での催し、「わらの文化―入門の集い」に参加させていただき、またひとつ、心豊かになるものに接することができたと、まずお礼申し上げます。

美郷町の町長や教育長らこの街のリーダーたちの、地元の生活に根差した文化である「藁の文化」の伝承への思いが、決意がこもった、さりげなくも、できの素晴らしい——失われつつある「わら文化」を次世代に伝えていきます——とのタイトルとなり、素敵なポスターとなって、できあがっていました。

このポスターの呼びかけが、地元にたくさんいらっしゃる、藁とともに人生を生きてきた方たちの思いと重なり、入門の集いは定員をはるかにうわまわる活況で、熱く、楽しく、伝わってくるもののある集いとなっていました。

雪深い東北の一角にあって、とても元気な、そう思われる町でした。

当地の高齢者たちは、自分たちの長年の生活のなかで培い、身に着けてきた、いつもすぐ隣にあった藁を活かした生活文化を守り、作品を生み出し、仲間たちと楽しく過ごしていくことによって、また、囲炉裏端で行われた「昔語り」、美郷民話の会所属の皆さん、皆さん非常に上手で、ご当地に昔から伝わってきた民話を皆で受け継ぎ、語り伝えていこうとする熱いものがとても伝わってきたが、それらの活動の充実もあって、いわばアルツハイマーとは遠い所での高齢者として、それなりに充実の日々の獲得、この街の老人医療費はきっと、全国平均よりかなり少ないのではないかと、そう思わずにはいられなかった。

近隣3町村の合併で比較的最近誕生した町とのことだが、住民の方々の思いのうんとこもったであろう町名、「美郷」＝「美しきわがふるさと」。

町のシンボルマークとなっている、ひらがなの「み」の字のデザイン化されたもののセンスの良さ。きっと、これにも込めた思いはいろいろあるのであろう。

この街の来歴を読まなくとも、あの集まりに出席していて、それらのことを思っていたが、合併のときに描いたであろう町の将来図、町民が一体となつての、自分たちの生活文化を活かした「美しきわがふるさと」、美郷町づくりの確かな一歩。

質問が飛び交ったパネルディスカッション、パネラーも、質問者も同じ夢を藁の持つ可能性に託し、会場も盛りあがった。間違いなくそんな集まりであった。

角館の田口様、何とも素敵な慶應ボーイでした。たいへんお世話になりました。お心配りに感謝いたします。

失われつつある「わら文化」を次世代に伝えて行きます。このタイトルの下、「藁」の持つ「温かさ」、「温もり」に包まれ、何かが伝わった、実り多き集いであったと思います。

豊かな気持ちになって帰ってまいりました。ありがとうございました。



この度、秋田・美郷町で開催される「わらの文化―入門の集い」に、うらやす市民大学の学長である宮崎清先生から参加しないかと声をかけていただき、いっしょさせていただくことになりました。私と二人の友人は、ともに宮崎先生に教えを受けている学生です。

秋田行き的高速バスに乗りながら、先月の新聞でこのような記事が載っていることを思い出しました。見出しは確かこのようだったと思います。

“ピンチ水戸「わら納豆」”とあり、サブ見出しは“わら確保困難値上げ”となっていました。記事の内容は、…納豆用の稲藁の入手が難しくなっている現状で、納豆用には小型機が手作業で刈り取って天日干した稲藁が適しているが、藁が傷みやすいコンバインの導入が進んだこともあり、天日干しする農家が年々減ってきている…という記事で、美郷町に何うにあたって「藁」のことが印象深かったからか、興味ある記事でした。

「わらの文化…」のイベント会場は美郷町歴史民俗資料館で、かつては学校であったとか。素晴らしい会場では“わら細工の実演と体験”と“民話会の語り部”などをみさせていただいた。

大学の宮崎講座ではホワイエ（囲炉裏）を学び、私たちのチームは浦安における歴史・民俗・文化などを探し出し、これらを”語り部シリーズ”の構築“として提案したばかりでした。美郷民話会のご婦人たちの”昔語り”は、それぞれが特徴ある語り口で、感情導入がなされ、聞く者にとっては楽しいひとときになったことは間違いありませんでした。これこそが”語り部”であることを、教えてもらったような気がいたします。

この日のメインである宮崎先生の基調講演は、聴講をしたい方で、会場に入れない人もいたと聞いています。私は、演題は違いますが、先生の講演を聴講する機会に恵まれ、何回かお聞きするチャンスをいただきました。この日の先生のお話は、かつてない熱弁ぶりで、力が入っていることが窺えました。これも聴講している皆さんの熱意が、そうさせたのではないかと感じているところです。熱心にメモを取る姿も拝見、先生の愛用のカメラを預かり、カメラマンとして会場の雰囲気カメラにしっかりと収めさせていただきました。

角館の田口宗平社長には、丁寧にお出迎えをいただき、美郷町までご案内をいただきました。美郷町に伺ってからは、松田知己町長をはじめ教育長、職員のみなさんにはたいへんお世話になりました。町長と職員の方の見事な息の合った連携ぶりも拝見し、併せて名所旧跡の数々へご案内をいただき、雪どけとともにラベンダーが彩る場所へも。お酒も美味しくいただきました。感謝です。

帰りには、立派な冊子「秋田「横手・美郷」―平泉の源流―」を頂戴しました。平泉文化ならびに後三年合戦など、数々のことを拝読いたしました。文中には、なんと“後三年合戦の伝説”に、納豆伝説が書かれてあって、その時代からあったのかと驚かされました。「わらの文化」を開催した美郷町のみなさまのますますのご発展を念じております。

イラストは、会場入口にあった、藁でつくられた鍾馗様を描いたものです。いかがでしょうか。



鍾馗様

2016年3月、私は秋田県美郷町で開かれた「『わらの文化』入門の集い」に参加しました。藁の文化の第一人者たる宮崎清先生が基調講演をされ、関係者によるパネルディスカッションが行われました。場所は、秋田県美郷町の歴史民俗資料館で、廃校になった学校跡に昨年10月に開館したばかりとのことです。この資料館には、藁で作られた生活用品がたくさん展示されていました。藁で作られたカーペット(筵)、ロープ(荒縄)、雨具(蓑・笠)、履物(草鞋)、保温具、育児用具、保存袋(俵・穀物用の袋)等々。これらは昭和40年代ごろまで、農家で作られ、使われていたものです。古くは、家屋の屋根材にも藁が使われていたことは衆知のことです。

今年の1月に、やはり宮崎先生のお誘いで訪問した福島県三島町の小正月行事では、豊作を祈るサイノカミ(行事)で、雪のなかで切り出した杉などの高木(ご神木)に藁を巻き付け、夜になると点火して、五穀豊穡・無病息災・厄落とし等を祈ります。雪の積もった田圃で行われる1年の農事の始まりとしての雪中田植えは、粃や藁が主役です。豊作を祈ります。ご承知のとおり、各地の注連縄も藁で作られます。信仰・祈りの分野にも藁の文化は生きています。

しかし、昭和40年代に米作りにコンバインが使われるようになって、収穫時に稲の茎が細断されることになりました。このため、材料(長いワラ)が不足するようになり、代わって石油由来のプラスチック製品が広く使われるようになって、これら藁の文化は廃れていったものと思われる。

我々の生きている21世紀は、モノのあふれる時代になっています。一方で、石油・石炭・鉱物資源等の地球資源の枯渇が心配されています。また、CO₂や汚染物質等の排出増で地球環境の破壊が心配されています。今は、使い捨てではなく、循環型の社会が求められているのかもしれませんが。石油ではなく、再生可能で、光合成でCO₂からO₂を作り出す森林資源が脚光を浴びる時代になっています。石油由来で、使用後、捨て方に困るプラスチック類ではなく、簡単に土に戻る藁の利用を考えねばなりません。

私は、もともと、「鉄屋」でした。製鉄会社に30年余り勤務していました。鉄や鋼は、材料の鉄分(鉄鉱石)が地中に豊富で、鉄鋼(素材)の価格も比較的安く、強く、しかも、最終的には錆びて土に戻ります。不要になった鉄鋼製品は、電気炉で溶かして、鋼として再生できます。

稲も土から生まれ、土に帰ります。土に戻る前の藁に、もう一度働いてもらいたいものです。藁の利用を、再度、考えるべきときに来ているように思います。ただ、プラスチック製品は安くて便利です。単に、藁文化に戻るべきであると言っても、なかなかおいそれとはいかないことと思います。プラスチック製品にはない藁の良さを見出して、その部分から藁の利用を再開することになるのではないのでしょうか。宮崎先生は、講演のなかで、藁を使った敷布団の効用を説いておられました。

今の日本の農業を支える主体は、高齢者です。コンバイン等の機械類が農家に普及し、農家は重労働から解放されました。お蔭で80歳を過ぎた人たちも農業・稲作に従事できます。また、稲の品種改良で、施した肥料の割に実りの良い短い茎の稲が普及してきています。短いイネの茎、つまり、藁は利用しにくいように思われます。このような、ある意味で進歩した稲作と、藁の文化をどのように調和させればよいのか、我々の知恵が問われています。

環境問題と資源問題を抱え、モノのあふれる時代になっている現在、経済成長を抑制すべきであるとの意見がだんだん強くなってきています。日本は、安全な国で、自然環境に恵まれ、世界一の長寿国です。安心や人の絆、心の豊かさ等が求められる時代になっています。藁の文化を通じて新しい文化の時代を育てられそうな気がします。日本は十分豊かになりました。豊かさを使って、賢く、好ましく、そして巧みに生きることを考えねばなりません。そして、次の時代につなげる文化や技術、哲学を生み出さねばなりません。藁の文化には、そこに行けば人びとの心が響き合い、会話が弾み、老若男女が癒されるような場が備わっているのかもしれませんが。藁で何を作ろうか、どのように作ろうか、出来栄はどうか、誰が買ってくれるか、藁の良さは何か、皆で作ったらどうなるのか、誰がリーダーになるのか、営業担当を誰にするか、原料確保はどうするか、新しい手法を工夫する、設備投資も考えよう……

藁の伝統・文化を伝えていくこと、残していくことは、本当に大事だと思う。そのことを面白く、楽しく行うことができれば最高ではないか。こんなことをしたい。

- ・2020年のオリンピックを、日本文化とジャパニーズカルチャーを、高齢者と子ども・若者たちとの競演によって、多くの若者や外人たちに伝えるイベントにしてみたい。

高齢者たちには、手の込んだ伝統的な藁工芸品を、がんばってつくっていただきたい。

藁に初めて触れる子どもや若者たちは、極めて簡単に3分くらいでつくれるものをつくる。藁を藁で縛ることが難しければ、着物の使い古しを裂いた紐で縛ればいい。かえって、別の素材と組み合わせることによって、藁自体が引き立つかもしれない。藁のものづくり体験は、子どもや若者たちにとっては日本における伝統的素材としての藁の価値を見ず貴重な機会になるに相違ない。

そして、高齢者たちの作品と子ども・若者たちによる作品を一堂に集め、展示する。会場を訪れる外人たちに記念品として無償でお渡ししてもいい。初めて藁に触れる外人もたくさんいるだろう。コメの実をつけてくれる植物だということを知って、驚き感激する人たちがほとんどであろう。マスコットとして大切に本国に持ち帰ることだろう。作り方を教えてという外人もいることだろう。そしたら、一緒につくればいい。藁が世界の人びとを結んでくれるのではないか。

これが、いま、私が考える最大の「藁の文化」の普及方法です。

1枚の画像を添付します。私の家のコンバインによる刈り取りの様子です。根刈りした藁は、裁断されずに、長稈のまま立つようになっています。これは、牛に食べてもらうように乾燥させています。藁は、実に大切な自然からの贈物です。



長稈のまま根刈りしてくれるコンバイン

「ワラ」のマスコット人形 MK



3分ではつくれませんが、初めて藁に触れる子どもや若者たちにもできる藁のものづくりです。

つがる市職員の長瀬公秀さんの作品です。長瀬さんは地域の方々とともに稲垣「藁の会」(会長：野崎克行さん)を組織され、さまざまな活動を行っています。本誌『藁』には、その様子をご紹介いただけることになっています。皆さまのご活動の様子をぜひお知らせください。「藁の文化」の情報交換誌として、本誌『藁』を育ててください。宜しくお願いいたします。



上の写真は、美郷町歴史民俗資料館における「わらの文化入門の集い」および交流会の様子です。撮影:常田純孝

秋田県仙北郡美郷町教育委員会 教育長 福田世喜様から、メッセージが届きました。

こんにちは。

3月5日の「わらの文化」入門の集いでは、ご講演とパネルディスカッションなどにおいてご指導をいただきまして、誠に有り難うございました。お蔭さまで、たいへん充実した集いができ、職員一同大いに喜んでおります。参加者の声をお聞きしましても、たいへん好評でありました。

今回の集いによりまして、県内各地のみならず、稲垣「藁の会」の皆様やうらやす市民大学の皆様、岩手大学の遠藤雅子先生とお知り合いになれたことも、大きな成果であったと思っております。今後、ネットワークをつくっていけたらと考えております。

そして、この地域に、自発的な団体として「藁の文化研究会」(仮称)がつくられて活動をめざしていけるように、行政の立場から後押ししていきたいとも考えております。

名称と内容、開催時期などは今後の検討によりますが、今回のような集いを来年度も実施したいと考えております。その点で、今後とも、さまざまな面でのご指導、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

深遠で広大な「藁の文化」を、ぜひ、多くの方々とともに探究し可能な実践を繰り広げていきたい。このたびの秋田県仙北郡美郷町における「藁の文化」の催事は、確実に、そのためのスタートになった。

美郷町の本堂城回区にある本堂城跡に樹齢500年の大きなケヤキの木があります。その木の下には、高さ4メートルの鍾馗様の藁人形が立っています。

進藤晃成氏(82歳)は、その鍾馗様の制作指導に長年携わり、伝統文化の継承に尽力されています。

・鍾馗様は、自分が小さいころは、あちこちの集落に護り神としてあり、春と秋の年2回つくっていた。昭和40年以降、農作業の機械化が一気に進み、コンバインの登場とともに、生活のなかで藁が使われることが減っていった。

藁が使われなくなったため、縄の結び方も知らない人が多い。

・制作は、田植えが終わった後、6月ごろに行う。材料のワラは稲刈り後に地域の人にとっておく。作業は半日かけて行い、お昼までに終わる。作業が終わると宴を設ける。

進藤さまには、ますますお元気で、今後とも、「藁の文化」の伝承と振興にお力添え下さるようお願いいたします。



ご寄稿をお待ちしています

皆さまの「藁の文化」への想いや写真など、随時、お待ちしております。
miyazaki.kiyosi@lapis.plala.or.jpにお送りください。

手汗想創

手に汗をかくほどにさまざまなことに想いをめぐらし提案・創造しましょう

